



Epidemiological Research Training Course VII-1

疫学研修 VII-1 報告書

ホーチミン市医科薬科大学

2016年8月17 - 20日

はじめに

今回で 10 回目となる本研修では、新しい試みとして、ホームページや Facebook を通じて参加者の募集を行い、資料は印刷せずにホームページ上で公開、全体を通じて演習を中心として、一部の講義は英語のみとした。事前登録者約 86 人、実際の参加者は 70 名であった。実際に疫学研究を行う実習グループは毎日の講義の後、日米越 3 カ国の講師と研究計画の立案を行った。以下、毎日の研修の様子を報告する。



ディスカッションの様子

8 月 17 日(水)

前日の研修初日はベトナム人講師のみで実施し、日本・米国からの講師は本日 2 日目からの参加であったため、講義前に改めて本研修の紹介の時間が少々設けられた。午前には後藤あや講師（福島県立医科大学総合科学教育研究センター）による、前日の復習、疫学と統計の役割、主な疫学研究デザインの説明だった。福島やベトナムでの研究事例について、参加者に直接的に問う演習が多く組み込まれていた。

午後は Ly Le (International University, Vietnam National University at Ho Chi Minh City) 講師が、研究計画の作成方法や注意点などを紹介した。各項目において実際に good と reject に分けた説明や、研究費を取得するための Felson's rules 等、具体的な説明がなされた。続いて、Tran Ngoc Anh Mai 講師 (International University, Vietnam National University at Ho Chi Minh City) が、Vietnam Journal of Science (VJS) を紹介した。ベトナムの次世代を担う科学者の育成や、国内の研究発展に向けたスタッフの熱心な姿勢が垣間見えた。



Khoa 講師による研修の説明



後藤講師による研究の流れの演習



報告者（照井）による研究事例紹介



事例に基づく演習



Le 講師による研究計画の説明



Mai 講師による VJS の紹介

8月18日(木)

午前には郡山千早講師によるバイアスと交絡の講義だった。特に **non-differential misclassification** については感度と特異度を参照して 2×2 表を埋め、オッズ比を計算する課題が与えられた。系統誤差とバイアスの違い等、参加者－講師間での深い議論が続き、後半の内容は翌日に持ち越しとなった。

午後は後藤講師による質問紙の適切な作り方の講義だった。質問の量、聞き方、質問の配置の仕方など、参加者にとって自身の研究計画立案にあたって参考になる内容であった。続いて、Nguyen Phuong Thao 講師 (International University, Vietnam National University at Ho Chi Minh City)による、新しい分野である分子生物学の紹介があった。



郡山講師によるバイアスと交絡の講義



郡山講師に質問する参加者



Thao 講師による分子生物学の紹介



昼休みの演奏会

8月19日(金)

午前は前日の郡山講師によるバイアスと交絡の残りの講義から始まり、ここでも活発な討論が展開された。続いて、横川博英講師（順天堂大学医学部総合診療科）による統計ソフトを使った記述統計とロジスティック回帰分析の解析と演習があった。午後は Alden Lai 講師（Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health）による Physician wellness の講義とディスカッション、ケーススタディを行った。特にアクティブな一日となった。



横川講師による講義



データ分析演習



Lai 講師による演習



8月20日(土)

午前は試験と研修評価アンケートが行われ、回収後に解答解説がなされた。続いて、毎日講義後に検討していた11グループが研究計画を発表した。その後、閉講式が行われ、試験の成績優秀者の発表、講師・参加者による感想や講評があり、記念撮影となった。



試験の様子



成績優秀者の発表



研究計画発表



記念撮影

全体を通しての感想

今回はこれまでの研修と比べ、講義と演習各々の比重が変わり、演習がより多く盛り込まれた。そのため参加者は頻繁にディスカッションを重ね、研究を実施する当事者としての意識をより一層持てたと考えられる。参加者や講師の垣根を感じさせず、双方向に多数の質問や意見が飛び交った。現地医師・学生の疫学に対する好奇心や、本研修を15年以上続けてきた講師と参加者間の強い信頼関係を伺うことができた。しかし、いまだベトナムの医師・研究者がカバーし切れていない課題が存在していることも垣間見えた。特に Lai 講師の social capital に関する参加者への質問に対して、反応した参加者が極わずかであったことから、現地の疫学研究で今後必要となるトピックスは積極的にこの研修で紹介することが求められると感じた。決して一方的なものではなく、現地の視点を踏まえるべく講師と参加者との双方向性のディスカッションが重要である。

報告者：照井稔宏（福島県立医科大学医学部5年）

※本研修には、ホーチミン市医師会の助成により参加した。